

福島県における震災前後の水揚状況の変化

福島県水産海洋研究センター 海洋漁業部

部門名 水産業－資源管理－その他

担当者 安倍裕喜・坂本啓

I 新技術の解説

1 要旨

福島第一原子力発電所の事故以降、福島県の沿岸漁業は操業を自粛しており、限られた操業範囲及び時間の中で試験操業を行っている。試験操業による水揚げ量は、対象種、操業海域及び漁法の拡大とともに年々増加していることから、その経過を把握するため、相双地区、いわき地区における漁法毎の水揚げ量と1隻当たりの水揚げ量(以下、CPUE)について整理した。さらに、2017年の水揚げ量上位20種について、2010年と2013～2017年の5か年水揚げ量変動について整理した。

- (1) 地区別の年別漁法別水揚げ量は、両地区共通では、底びき網、固定式さし網、沿岸かごが、地区別では相双地区が船びき網、いわき地区が貝けた網が増加傾向にある。
- (2) 底びき網や固定式さし網は、2016年から2017年にかけて水揚げ量が大きく増加し、特に相双地区において増加量が多かった(表1)。これはヒラメが試験操業の対象となったことが大きな要因として考えられる。
- (3) 2016年から2017年にかけては隻数も大幅に増加していることから、努力量の増加によりババガレイ、キアンコウ、アオメエソ、マコガレイ、ヤナギムシガレイの漁獲量が増加したことも、水揚げ量の増加が大きかった要因の一つであると考えられる。
- (4) 総水揚げ日数及び延べ隻数も年々増加し、2017年の相双地区ではそれぞれ382回、9,478隻、いわき地区ではそれぞれ540回、7,987隻となった(表1)。
- (5) CPUEは、両地区の底びき網、相双地区の固定式さし網、沖合たこかご、いわき地区の貝けた網で増加した。
- (6) 2017年の魚種別水揚げ量を2010年と比較したところ、ムシガレイで129%、マダコで83%、ババガレイで70%、キアンコウで56%となっていた。その一方で、マダラやヤナギダコでは10%未満であった(表2)。

2 期待される効果

試験操業の経過、現況を把握する上での資料となる。

3 適用範囲

漁業者、行政関係者、研究者

4 普及上の留意点

なし。

II 具体的データ等

表1 地区別年別漁法別水揚げ量及びCPUE

地区	項目	年	単位:日											単位:隻		
			総計	底びき網	船びき網	沿岸流し網	固定式さし網	貝けし網	沿岸かご	沖合たこかご	釣り	はえなわ	採貝簾	アサリ養殖	アオリ養殖	総水揚げ日数
相双	漁獲量(トン)	2010	19,527	6,015	8,854	134	1,974	461	723	54	65	20	78	1,148	-	-
		2012	122	76	-	-	-	-	-	45	-	-	-	-	23	279
		2013	393	141	150	-	-	-	-	102	-	-	-	-	55	1,409
		2014	642	260	272	1	11	-	-	2	95	-	-	-	92	2,268
		2015	1,341	449	752	10	58	-	-	19	53	-	-	-	192	5,734
		2016	1,801	674	856	21	66	21	49	103	7	-	-	5	236	6,645
		2017	2,633	1,233	901	11	142	47	123	142	25	3	0	6	382	9,478
	CPUE*(kg)	2012	440	336	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		2013	279	253	208	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		2014	283	319	293	26	58	-	1,342	-	-	-	-	-	-	-
2015		234	462	254	48	54	-	127	-	-	-	-	-	-	-	
いわぎ	漁獲量(トン)	2010	6,117	3,558	1,769	0	205	206	217	18	70	73	-	-	-	
		2013	13	13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	82	
		2014	100	48	23	-	14	13	1	-	-	0	-	132	1,190	
		2015	171	96	28	-	25	17	3	-	1	0	-	187	2,545	
		2016	299	221	23	-	19	25	6	-	5	1	-	309	4,758	
		2017	647	506	18	-	32	39	28	-	24	0	1	-	540	7,987
		CPUE*(kg)	2013	159	159	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	2014		303	146	83	-	27	253	-	-	-	-	-	-	-	
	2015		263	148	67	-	31	290	6	-	187	-	-	-	-	
	2016		210	156	43	-	15	377	6	-	12	-	-	-	-	
2017	415	324	86	-	20	576	20	-	14	18	-	-	-			

*漁獲量を延べ隻数で除したものを

注1:2010年迄は、沿岸かご、沖合たこかごは「かご、どう、つぼ」としてまとめて管理されていた。

注2:相双地区は2012年6月から、いわぎ地区は2013年10月より試験操業を開始した。

表2 試験操業における水揚げ量上位20種の水揚げ量の経過

魚種	単位:トン							対震災前年比(2017年)
	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2010年		
1 コウナゴ	137	176	431	765	585	1,862	31%	
2 ヒラメ	0	0	0	53	328	771	43%	
3 シラス	13	120	345	108	326	2,164	15%	
4 マガレイ	0	50	144	232	258	1,022	25%	
5 ババガレイ	0	0	0	16	171	244	70%	
6 キアコウ	4	22	28	56	165	295	56%	
7 マアナゴ	0	0	0	43	152	506	30%	
8 ミズダコ	96	79	61	124	148	796	19%	
9 マダコ	0	1	3	11	119	144	83%	
10 ウバガイ	0	13	17	46	85	641	13%	
11 アオメソ	3	3	3	23	75	158	48%	
12 マコガレイ	0	0	0	13	74	294	25%	
13 ヤナギムシガレイ	2	6	10	40	74	159	47%	
14 ヤナギダコ	26	28	22	30	72	1,751	4%	
15 マダラ	0	0	137	113	70	1,303	5%	
16 ヤリイカ	33	45	27	21	51	278	19%	
17 マアジ	1	18	26	50	48	205	23%	
18 ミギガレイ	27	52	41	47	42	208	20%	
19 ムシガレイ	0	0	4	28	41	32	129%	
20 オキナマコ	0	1	7	30	36	-	-	

注:2010年まではオキナマコはその他の水産動物として計上していた。

III その他

1 執筆者

安倍 裕喜

2 成果を得た課題名

- (1) 研究期間 平成 28~32 年度
- (2) 研究課題名 底魚資源の管理手法に関する研究

3 主な参考文献・資料

- (1) 漁協より提供される漁獲高日報及び月報
- (2) 平成 22 年版福島県海面漁業漁獲高統計